

私達のあしあとを

この悠久の大地に

福井県あわら市富津地区

福井県の北部、あわら市北潟・富津（とみつ）地区は石川県との境に位置し、日本海に面する標高 50～70 程度の丘陵地帯。戦後開拓事業が行われたが、急傾斜地が多く、強酸性土壌で作付けが困難だった。

1945（昭和 20）年 11 月、戦争被災者ら 35 戸が入植。北潟村（当時）の寺に分宿し、共同生活が始まった。金津町（同）に兵舎があり、その解体作業に従事した。材木を開拓地に運搬して、仮の共同住居「三角小屋」を建てた。

割り当てられた入植地に、開墾の一畝一畝を打ち込んだ。最初はジャガイモを作付けしたが、収穫量は少なかった。電灯架設工事に従事し、48 年に完了。だが、同年 6 月、大地震が同県を中心に北陸を襲った（福井地震と命名）。開拓者たちは、復旧作業と開墾作業を進め、同年 10 月には富津開拓農協を結成した。

スイカやダイコン、茶などを栽培し、土壌に適した作物を模索した。やがて、サツマイモ栽培に集約化を図った。幾多の苦勞を乗り越え、ブランド化に成功した「とみつ金時」は名産品となっている。

富津集落センター内に開拓記念碑がある。入植 35 周年を記念して 81 年に建立されたもので、「私達のあしあとをこの悠久の大地に」と刻まれている。傍らの碑銘板には、開拓の苦難が記されている。「地震風害に耐え 干魃は続くも土を愛し土に生きるもの等しく協同の旗の下に一致団結し 悠久なる大地の限りなき恵みを受け 明日に向かって歩みはつづく」とあり、懸命にこらえた強い気持ちが伝わってくる。

・福井県あわら市富津：富津開拓

「私達のあしあとをこの悠久の大地に」 富津入植三十五周年記念

昭和 56 年 11 月 1 日建立 富津区

碑文

昭和二十年十一月南方眼下に湖を望む国有地七十余町歩の原野に三十五戸が開拓の鋤を打ち込み私たちの郷土は誕生した。小屋を結んで越冬した宅地を造り道路を開き、炎暑吹雪を衝（つ）き朝月夜星の開墾も自給への道遠きを嘆く。電灯工事の完成で石油ランプに別れを惜しむ暇なく、共同作業場、集会所、大山神社の神殿建立と村造りは進む。漬物加工、コナゴ漁に夢を託するも運営の困難さは言語に絶し、技未熟も加えて不成功に終わる。入植以来渴望久しい上水道の建設成り、谷川よりの水汲の労苦から解放され人人は歓聲をあげて喜ぶ。ここに自らの手で体得した経験を蔬菜園芸に求め、時代の進展に即応した機械化営農が導入され農家経営に潤いをもたらす。実に二十余年の歳月は流れる。地震風害に耐え干魃は続くも土を愛し土に生きるもの等しく協同の旗の下に一致団結し悠久大地なる限りなき恵みを受け明日に向かって歩みはつづく。斯くして起伏に富んだ畑地は丘陵地開発にて、全形容を改め松林の原野は昔日の面影もなく永住の目的を達成

した。ここに富津開拓農協の業務と使命は終わる。よく三十五年の風雪に堪えてその礎は築かれ、入植初代の人々の辛苦を偲び子々孫々の繁栄を願って、ここに記念碑を建立する。

昭和五十六年十一月一日 富津区

(注：句読点は協会で付与)



